堀河百首題「鷹狩」をめぐって

内藤愛子

堀河百首題の特徴の一つとして、四季の夏部、冬部の歌題の増加が指摘されている。殊に、冬部の二十歌題のうち、『堀河百首』成立以前には、勅撰集や百首歌、歌合等であまり取り上げられていない歌題が数多く含まれていることは周知のことである。[注(1)] 今回は冬部の歌題の一つである「鷹狩」を取り上げて、この歌題を詠出歌人達がどのように捉え、詠じたかを具体的に検討し、堀河百首題「鷹狩」の特徴を考察してみたい。

鷹狩は、『万葉集』以来歌材として見出され、『万葉集』において、鷹狩を歌材としてみえる歌は五首（4035・4036・4037・4178・4179）あり、そのうちの二首（4035・4178）は長歌である。

4036 矢形尾の鷹を手に据ゑて三島野に猟らぬ日まねく月ぞ経にける

4037 二上のをてもこのもに網さして我が待つ鷹を夢に告げつも

4179 矢尾形の真白の鷹をやどに据ゑ掻き撫で見つつ飼はくしよしも

次に、『堀河百首』の四季題は屏風歌において詠まれた歌材と数多く重なりが指摘されている。その屏風歌において「鷹狩」がどのように詠まれているかをみてみよう。

屏風歌において鷹狩は料歌としてみられ、四季のうち、夏季を除いたすべての季節にみられ、特定の季節との関わりがなく、冬季の料歌との限定はなされていない。[注(2)]

例えば、屏風歌が極めて多くみられる『貫之集』（『私家集大成中古Ⅰ』57）を取り上げて、「狩」を題材とした屏風歌を抽出して季節に分類してみると次のようである。

『貫之集』で「狩」の屏風歌は、十五首みられ、十五首を分類すると「狩」は三首（39・82・275）あり、いずれも秋季の歌材が詠まれており秋季のものと捉えられる。「小鷹狩」は、七首（15・16・110・233・388・446・535）あり、秋季の歌材に拠っている。また、「大鷹狩」は五首（20・111・240・241・539）で、冬季の歌材に詠じらている。

このことから、『貫之集』の屏風歌において、「小鷹狩」は秋季、「大鷹狩」は冬季と区別がみられる。また、秋季の料歌として「狩」や「小鷹狩」の歌が冬季の「大鷹狩」よりも多く詠じられており、少なからず秋季の歌材として「小鷹狩」が認識されていたことが知られるであろう。

また、堀河百首題との共通の項目分類が見られる『古今六帖和歌』において、第二帖の野の項目に、「おほたか」、「こたか」、「おほたかかり」、「こたかがり」という分類がなされている。そのうち、「おほたかかり」が七首あり、その七首中一首（1199）は秋季の詠歌で、冬季の詠歌は三首（1194・1195・1196）である。だが、「こたかがり」は六首あり、すべて秋季の詠歌である。

このように、「こたかがり」は秋季で、「おほたかかり」は冬季の

歌材という分類意識が『古今六帖和歌』において窺える。

初期の百首歌において、「鷹狩」をみると、『順百首』（『私家集大成中古Ⅰ』105）の冬の十首の中に「鷹狩」を詠じた歌が一首（516）みられるのみである。また、同作者の『順集』（『私家集大成中古Ⅰ』94）のあめつちの歌の冬に、「鷹狩」を詠んだ歌が一首（184）配列されている。

516きゝすなくのへになこひそ冬こもりかるへきものか人のこゝろは

184ゑこひする君かはしたか霜かれの野になはなちそはやく手にすゑ

このことから、源順は「鷹狩」が冬季の歌材として意識していたと捉えられるであろう。

以上のことから、屏風歌において「鷹狩」は、「小鷹狩」と「大鷹狩」と区別がみられ、各々秋季と冬季とに分れている。だが、初期百首である『順百首』においては鷹狩を冬の歌材として捉えていることが知られる。堀河百首題において、鷹狩が冬の歌題として定着するに当って、『順百首』との影響関係が認められるであろう。

また、勅撰集において、「鷹狩」が歌題として初出は、『後拾遺集』であり、冬の部立に三首（393・394・395）の「鷹狩の歌」が配列されている。そのうち二首（394・395）は「鷹狩をよめる」という詞書が付けられ、もう一首（395）は障子歌である。

393とやかへるしらふの鷹の木居をなみ雪けの空にあはせつるかな

394うちはらふゆきもやまなんみかりののきすのあともたづぬばかりに

395はぎはらもしもがれにけりみかりのはあさるきすのかくれなきまて

『後拾遺集』以後の勅撰集において「鷹狩」は、冬の歌題として配列され、冬の歌題としての定着が窺える。

歌合の歌題として「鷹狩」の初出は、長暦二年晩冬権大納言師房歌合（『平安朝歌合大成3』125）であり、冬の歌題の一つとして挙げられている。

左　弁乳母

16御狩野のたかくきこゆる鈴の音にしのぶる雉を思ひこそやれ

右　宮内

17箘鷹のとぶ尾の鈴の音すなり野辺の雉子は立つ空もあらし

以上のことから、歌題としての「鷹狩」は、長暦二年晩冬権大納言師房歌合や『後拾遺集』に冬季の歌題とされていることから「鷹狩」が冬季の歌題として定着したのは比較的新しいと言えよう。また、屏風歌や『古今六帖和歌』で詠まれていた「小鷹狩」は、勅撰集において秋季の歌題として見られない。

このように『堀河百首』において、「鷹狩」が冬の歌題の一つとして取り上げられたのは、少なかず、初期百首歌である『順百首』の影響が考えられるであろう。また、『堀河百首』以降の勅撰集において、冬の歌題の一つとして配列がみられることから冬の歌題として定着化の傾向が見受けられる。

次に、堀河百首詠出歌人達が歌題「鷹狩」をどのように捉え、詠じたかを具体的に検討を加えてみよう。

堀河百首題「鷹狩」の十六首のうち、半数以上である九首が歌枕、地名を詠み入れている。『堀河百首』以前の「鷹狩」の歌題や屏風歌には、歌枕、地名を詠み入れた歌例が管見の範囲で見当たらず、『堀河百首』の「鷹狩」の特徴の一つと捉えられる。

「鷹狩」に詠まれた歌枕、地名を挙げてみると、九首のうち、「交野」は六首（1060・1064・1065・1067・1068・1071）と多く、「石瀬野」（1061）、「う

だ」（1063）、「比良」（1059）は、各々一首ずつである。それら各々の歌枕、地名について検討を加えてみたい。

まず、「交野」を取り上げてみよう。「交野」は、河内の歌枕で、現在の交野市だけでなく枚方市を含めた広い範囲である。当地は、桓武天皇以来、禁裏御料の野とされ、狩猟の場としてばかりでなく、景勝の地でもあったことは、『伊勢物語』第82段「渚の院」や『枕草子』「野は」等にもみえ、かなり有名で一般化した歌枕、地名と言える。

「交野」を詠み込んだ歌六首のうち、「交野」は二首で、「交野の原」二首、「交野の里」一首、「交野のを野」一首に分けられる。「交野」の二首（1068・1071）は、

1068とやかへるたなれの鷹を手にすゑて雉子鳴くなる片のべぞ行く
1071御狩人ちかく成行くすずの音をかたののきぎすいかがきくらん

で「交野」と「雉子」を詠じている。この詠み合せの例歌は、多くみられ、一般化された詠み合せといえる。だが、「雉子なく」と雉子を聴覚的に捉え、しかも「交野」と共に詠まれている早い時期の例歌として、『曽根好忠集』257（『私家集大成中古Ⅰ』105）が挙げられる。

257ききすなくかたののはらをすきゆきては木の葉もことに色つきにけり

少なからず、この歌の影響を受けた推察も可能であろう。

「交野の原」は、二首（1065・1067）みられ、『堀河百首』成立以前には、管見の範囲において歌例として、前掲の『曽根好忠集』257の一首見出されるのみである。殊に、藤原基俊の歌（1067）は、好忠の歌（257）の上二句を用いてた詠歌と捉えられるであろう。

1067やかた尾の鷹手にすゑて朝たてばかたのの原にきぎすなくなり

また、「交野の原」は、『江帥集』36（『私家集大成中古Ⅱ』51）に詠まれている。

36ちはなぬくかたの、はらのつほすみれわかむらさきにいろそかへよる

このように、「交野の原」は『堀河百首』詠出当時には詠まれた歌枕、地名であり、それ以後も歌例が挙げられることから、歌枕、地名として詠まれ続いている傾向がみられる。　次に、「交野の里」は、源師頼の歌（1060）の一首で、『堀河百首』以前に歌例のない新奇な歌枕・地名と言える。

1060御かりすとならの真柴をふみしだきかたのの里にけふもくらしつ

また、この歌以外には、勅撰集においては『新古今集』に一首（1110）しか見出せないことからも、「交野の里」は歌枕、地名として定着をみなかったとみえる。

1110逢ふ事は交野の里の笹の庵篠に露散る夜半の床かな

同様に一首しかない「交野のを野」は、源俊頼の歌（1064）で、この歌以前に歌例を挙げられない歌枕、地名である。

1064日かげさす豊の明のみかりすとかたののを野にけふもくらしつ

だがしかし、「交野のを野」は、『江帥集』225にみられることから、『堀河百首』詠出当時に詠まれた歌枕、地名と言ってよいだろう。

225あふことは交野のを野の群すすきをはなか露をむすひかねつも

また、元永元年十月十三日忠通歌合（『平安朝歌合大成5』298）の「鷹狩」の雅兼の歌（29）に

29御狩する交野の小野としりながらなにと雉子の跡を求むらむ

とあり、『金葉集』283内大臣家越後の歌に詠まれている。このことから「交野のを野」は『堀河百首』詠出歌人達と同時代の歌人達に詠まれていたことが知られる。

283理や交野の小野に鳴く雉子さこそは狩の人は辛けれ

このように、「交野」は、詠み習わされた「交野」として詠じるのではなく、「交野の原」「交野の里」「交野のを野」というように既成の歌枕、地名を基に工夫がなされ、「交野の原」以外は、『堀河百首』詠出歌人達に拠った新しい歌枕、地名の開拓がみられ、その中には『堀河百首』以降に歌枕、地名として定着がみられる。また、「交野」という従来の歌枕、地名に対しても詠出歌人達の苦心の跡が窺がえるであろう。

「石瀬野」は、『万葉集』において、二首（4178・4273）みられ、それらはいずれも鷹狩が詠じられている。その二首のうち、4178は、「白き大鷹を詠む歌」という詞書きの大伴家持の長歌で、もう一首は、短歌で、いずれも秋萩が詠み入れられ、秋季の詠歌である。

4273石瀬野に秋萩しのぎ馬並めて初鳥猟だにせずや別れむ

「石瀬野」は、越中の歌枕、地名で、現在の富山県射水郡大門町の北方、高岡市石瀬一帯の地かとされている。「石瀬野」は、『堀河百首』成立以前に歌例が見当らず、藤原顕季の歌（1061）のみで、これらの万葉歌を典拠とした詠歌と言えるであろう。殊に、顕季の歌は4178の長歌に「石瀬野」や「白塗の　小鈴もゆらに　あはせ遣り」、「ましらふの鷹」とあることから、その長歌に拠ったものと言って間違いないだろう。

1061しらぬりの鈴もゆらにいはせ野にあはせてぞみるましらふの
たか

そして、顕季の詠歌は、『万葉集』の4178を本歌とし、「石瀬野」は、『万葉集』を典拠とした歌枕、地名と言える。

このような「鷹狩」と「石瀬野」の組合せに拠る歌が、『堀河百首』以降に詠じられ、また、『和歌初学抄』に「いはせ野・かりばの小野（以上、鷹狩）」とあり、鷹狩の歌枕として、定着が看取できる。「石瀬野」が歌枕として定着するに当って、藤原顕季の詠歌が少なからず影響を与えたと推察できる。

次に、「うだ」もやはり『万葉集』に詠歌（191・1613）にみえ、そのうち191は出狩に触れた歌である。また、記紀歌謡7の来目歌にも「うだ」は見出せる。

191けころもを時かまけて出でましし宇陀の大野は思ほえむかも

管見の範囲では、『堀河百首』成立以前において、「うだ野」を詠じた例歌として『後撰集』に一首（1034）がみられるのみで、あまり詠まれていない歌枕、地名と言えるだろう。

1034宇陀の野は耳成山か呼子鳥呼ぶ声にだに答へざるらん

「うだ野」は、大和の国の歌枕、地名とするものと、山城の国の歌枕、地名とする二ケ所見出される。『五代集歌枕』『和歌初学抄』『八雲御抄』は、大和の国とし、現在の奈良県宇陀郡宇陀町の野とし、古くから狩猟地として知られている。また『嵯峨野物語』では、「代々の御鷹場は数十ケ所なり。その所おほし。殊に宇多交野御野と申すは。天皇の御鷹場のゆへなり。」とあり、現在の京都市右京区宇多野としている。いずれも狩場であり、古くから、「うだ野」については二説をめぐって論じられている。

『堀河百首』において、「うだ野」を詠み入れたのは、藤原仲実の歌（1063）である。

1063やかた尾のましろの鷹を引きすゑてうだのとだちを狩りくらし
つる

この歌は、『万葉集』4179と『古今六帖和歌』1173の詠歌をふまえて一首を構成し、「うだ野」という新奇な歌枕、地名を入れて、新しさを加味している。

4179矢形尾の真白の鷹をやどに据え掻き撫で見つつ飼はくしよしも

1173やかたをのましろの鷹をひきすゑて君がみゆきにあはせつるか
な

また、『堀河百首』の詠出歌人である大江匡房の歌集である『江帥集』に、「うだ野」を詠み入れた鷹狩の歌（140）があり、源俊頼の歌集『散木奇歌集』にも「うだ」を詠み入れた歌（705）が見当ることから、「うだ野」は、『堀河百首』詠出時期の歌人達には注目された歌枕、地名と捉えられよう。

140雪ふかきうた野のみつの草がれにましろの鷹をあはせてそゆく

705あけほのにうたのくろよりたつしきのはねかく音やよろつよのかす

このように、「うだ野」は、『堀河百首』成立以前には、あまり歌例が挙げられないが『堀河百首』詠出歌人達に詠まれていることから、「うだ野」は、『万葉集』を典拠とした歌枕、地名と考えて間違いないだろう。

「比良」は、近江の国の歌枕、地名で、今の滋賀県滋賀郡比叡山の北の連山に広がる野と考えられる。「比良」に関しての歌枕、地名は「比良山」、「比良高嶺」等がある。「比良山」は、北からこの山を越して琵琶湖に吹きつける風の激しさを詠じた歌は『万葉集』（1719）にみられ、詠まれ続けている。

1719楽浪の比良山風の海吹けば釣りする海人袖返る見ゆ

「比良」に関しての歌枕、地名は、『堀河百首』成立以前において、歌例は少ない。『堀河百首』において、「比良」を詠み入れたのは、源国信の歌（1059）一首のみである。

1059吹きわたすひらのふぶきの寒くともひつぎのみかりせでやまめやは

だが、「比良山風」や「比良の高嶺」を詠み込んだものが『堀河百首』詠出歌人達の歌に見出される。「比良山風」が『基俊集』25（『私家集大成中古Ⅱ』70）にあり、「比良高嶺」は、『江帥集』347や『六条修理大夫集』172（『私家集大成中古Ⅱ』59）にあることから、『堀河百首』詠出当時には、詠まれていたことが知られる。

25ささ波や比良の山風はやからし波まに消ゆるあまのつり船

347みわたせは比良の高嶺の春霞ちとせをこめてたちにけるかな

172雪きえぬ比良の高嶺も春くれはそれともみえす霞たなひく

また、「比良」以外の「比良山風」や「比良高嶺」は、『千載集』や『新古今集』に、それらを詠み込んだ歌が見出されることから、「比良」というよりは、「比良山風」、「比良高嶺」として『堀河百首』成立以降に定着していったと推察できるであろう。

このことから、源国信の歌（1059）は、あまり詠まれていない「比良」という新奇な歌枕、地名に拠って吹雪の激しさを引き、冬の鷹狩の厳しさを強調していると捉えられるであろう。

以上のように、「鷹狩」に詠み込まれた歌枕、地名は、「比良」以外はすべて御料場のあるところであることから、鷹狩の行われる猟地のある歌枕、地名を用いている。

また、『堀河百首』以前の鷹狩の屏風歌や「鷹狩」の歌合歌や勅撰集における鷹狩の詠歌には、歌枕、地名に拠った例歌のないことから、歌枕、地名を詠み込むということは、『堀河百首』における「鷹狩」の詠法の工夫の一つと言えるであろう。しかも、「石瀬野」や「うだ野」や「比良」のように『万葉集』に典拠を求めたり、「交野」のような従来使われていた歌枕、地名には、詠み入れるに際して、歌人達各々が少しずつ変化を付け、苦慮していた跡が知られるだろう。

次に、「鷹狩」における歌語の特徴についてみてみよう。十六首において、鷹の種類が詠まれていることが挙げられる。「鷹」は四首（1058・1065・1067・1068）で、「しらふの鷹」は五首（1057・1061・1062・1066・1070）「はし鷹」は二首（1069・1072）「ましろの鷹」は一首（1063）であり、鷹を詠み込まない歌は四首（1059・1060・1064・1071）にすぎない。

「しらふの鷹」は、白色の斑点のある鷹のことで、『万葉集』以来詠まれ、『堀河百首』成立以前の勅撰集においては『後拾遺集』393に、

393とやかへるしらふの鷹の木居をなみ雪けの空にあはせつるかな

一首あるのみで、『万葉集』に典拠を求めたものであろう。「ましろの鷹」もまた、歌例がなく、『万葉集』4179の詠歌を典拠としたものと察せられる。

「はし鷹」は、『万葉集』に詠まれておらず、『堀河百首』成立以前の勅撰集において、『後撰集』1171（雑一）『拾遺集』1230（雑恋）『後拾遺集』267（秋上）の三首が挙げられる。

1171わするとは怨みざらなむはし鷹のとかへる山のしひはもみぢす

1230はし鷹のとがへる山のしひしばのはがへはすともきみはかへせじ

267とやかへりわがてならししはし鷹のくるときこゆるすず虫の声

それらは、「はし鷹」と「とかへる」や「とやかへる」と共に詠まれ、この三首のうち秋の詠歌は267のみである。このパターンに拠る例歌は数多くみられ、四季詠にはみられず、それ以外の恋愛的内容の人事詠に用いられている。例えば、『兼輔集』143（『私家集大成中古Ⅰ』47）に

143はしたかのとかへるやまのしゐのはゝときはにかれぬなかをたのまむ

とあり、「はし鷹」と「とがへる」と共に詠むパターンは四季歌とは関係のないところで、定着した詠法と言えるであろう。

また、「はし鷹」は、小形の鷹でハイタカと呼ばれ、小鷹狩に使用されていたタカ類である。『古今六帖和歌』において、「こたか」の分類があり、その四首のうち三首までが「はし鷹」を詠じている。また、『後拾遺集』267において、「はし鷹」が、秋季の詠歌に歌材として見出される。

このように、「はし鷹」は「とがへる」と共に詠むパターンの定着がみられ、小鷹狩に使用された関係から秋季の歌語とされ、勅撰集において歌題としては見られない。

また、『堀河百首』において、冬の歌題「鷹狩」に、「はし鷹」が詠まれているのは二首（1069・1072）みられる。だが、「はし鷹」が冬季の「鷹狩」に詠まれている例歌として、長暦二年晩冬権大納言師房歌合の17にみられるのみである。その歌には、「はし鷹」が冬季として捉えられており、それを踏まえて『堀河百首』の詠歌においても「はし鷹」が冬季の鷹狩に詠まれたとも推察できよう。

このように、「はし鷹」を冬季の歌題としての「鷹狩」に詠んだことは、季節の詠み違えと捉えることが可能であろう。[注3] そして、『堀河百首』成立以降の勅撰集である『金葉集』（276・281・287）、『千載集』（244）では、「はし鷹」が冬季の詠歌や冬部に「鷹狩」の歌群が配列されていることから、冬季の「鷹狩」に詠じられることの定着が看取され、定着に際して『堀河百首』の詠歌が影響を与えたと考えられるであろう。

「鷹狩」の歌において、具体的な鷹の種類を詠み入れるということは、あくまでも鷹に視点を置き、狩の方法やその様子を意識していたことが知られる。

堀河百首題「鷹狩」の歌語の特徴としては、冬の歌題としての意識から、冬の季節の風情を表わす歌語が詠み入れられている。「雪」は五首（1057・1062・1065・1069・1070）あり、「吹雪」一首（1059）がみられ、冬の年中行事である「豊の明」一首（1064）が詠じられている。

また、「鷹狩」において、鷹狩の用語が歌語として用いられている。このことは、屏風歌における鷹狩にも看取される。[注4]『堀河百首』

の「鷹狩」には、「鳥立」、「矢形尾」、「白塗の鈴」、「をぶさの鈴」、「木居」や「とかへる」、「あはす」、「据る」等が挙げられる。そのうち、「をぶさの鈴」は詠まれていない新奇な歌語と言えるだろう。このように、鷹狩に関係ある用語を歌語とした表現方法は『万葉集』の鷹狩詠以来みられ、その詠法を継承しながら、新奇な歌語を加えていると言えるだろう。

次に、『堀河百首』の「鷹狩」の十六首において、鷹狩の様子を詠じているが特徴的な発想に拠る詠歌を挙げてみよう。

まず、発想のおもしろい詠歌として藤原公実の歌（1057）を挙げられる。

1057 狩くらし上毛の雪もはらはねばしらふのたかと人やみるらん

雪降る中で狩をしている狩人と白斑の鷹に見違えてしまうという奇知に富んだ構成になっている。また、雪の白さと白斑の鷹の白を呼応させ、色彩を意識している。そして、「上毛」という鷹の縁語に拠っている。

また、同様に降る雪の白さと真白斑の鷹を呼応させ色彩を意識した詠歌として藤原顕仲（1062）が挙げられる。

1062 ふる雪に友むれ鳥しるべにておけどもみえずましらふのたか

この詠歌の「友むれ鳥」は、『堀河百首』以前には見えない難解な新奇な歌語である。確かなことは判らないがこの歌は恐らく、雪の白さと黒色の鳥との色彩的なおもしろさを意識したものと推察されるであろう。

これら二首は、色彩を意識した構成に拠った詠歌と捉えられるであろう。

また、特徴的に詠歌として源俊頼の歌（1064）が挙げられる。

1064 日かけさす豊の明のみがりすとかたののを野にけふもくらしつ

豊の明のための御狩のことが詠まれ、その発想の新しさと言えるだろう。また、「日かけさす」は、「豊の明」にかかる枕詞で、この詠歌以前には、『実方中将集』173（『私家集大成中古Ⅰ』133）に一首のみであり、その歌の詞書より、五節の舞姫との贈答歌のかへしの歌に見出せる。

173 ひかけさすとよのあかりにみしかともかみよのことははやわすれにき

このことから、「日かけさす」は、少なからず、この詠歌の影響を受けたのではないかと考えられるであろう。また、管見の範囲では、「日かけさす」の詠まれた歌は、三首みられ、1064の他『永久百首』の冬の歌題「五節」の二首（367・370）である。それら三首のうち、二首（1064・370）は源俊頼の詠歌であり、他の一首（367）は常陸の歌である。

367 日影さすをみのあかひもうちとけて立ちまふ人をもてはやすなり

370 日影さすとよのあかりにみつるかな我すべらきの千世のかざしを

このことから、「日影さす」は、詠まれることのない歌語であり、「豊の明」や「五節」に関する詞に関わる歌語と捉えられるであろう。しかも、源俊頼の詠歌にみられることから、「日影さす」は俊頼が求めた新奇な歌語と言えるだろう。また、『堀河百首』から『永久百首』の成立時代には、少なくとも詠まれていたことが知られる。

また、竹下豊氏は、源俊頼の歌（1064）と影響関係が想定される歌として源師頼（1060）があり、ほぼ三句が一致し、一方が一方を意識して詠んだと認められるだろうとしている。[註(5)]

1060 御かりすとならの真柴をふみしだきかたのの里にけふもくらしつ

この1060と下三句が同じでありながらも、「日影さす」というあまり詠まれていない新奇な歌語に拠ったところに源俊頼の新しい歌題を詠じる際の工夫が看取されるであろう。

次に、「鷹狩」の十六首において、類似発想の詠歌として次の二首（1063・1066）が挙げられる。この二首は、藤原仲実の歌（1063）と藤原顕仲の歌（1066）で、上の二句目の鷹の種類と下二句目の鷹狩の場の相違のみで、同一の内容である。

1063やかた尾のましろの鷹を引きすゑてうだのとだちを狩りくらし
　つる
1066やかたをのしらふのたかを引きすゑてとだちの原を狩りくらし
　つる

この二首については、既に、竹下豊氏がご指摘に拠ると、藤原顕仲は、『堀河百首』詠進の際に、他の歌人の影響を受けやすかったらしいとし、この歌を挙げている。[注6]

次の四首（1061・1065・1069・1070）は、類型的発想に拠って鷹狩の様子を詠んでいる。

1061しらぬりの鈴もゆららにいはせ野にあはせてぞみるましらふの
　たか
1065みかりするかたのの原に雪ふればあはするたかの鈴ぞ聞ゆる
1069ふる雪に行へもみへず箸たかのをふさのすずのおとばかりして
1070雪ふりにしらふ鷹をあはせては鈴の音こそしるべなりけれ

これら四首は、鷹に付けている鈴の音という聴覚的表現に拠って鷹狩の様子を詠じている。そのうちの三首（1065・1069・1070）は、雪降る中での鷹狩が、鈴の音に拠って知るという発想である。隆源の歌（1069）の「をふさの鈴」は、詠まれていない新奇な歌語であるが、長暦二年晩冬権大納言師房歌合（『平安朝歌合大成3』125）の宮内の詠歌の上二句「箸鷹のとふ尾の鈴の音すなり」とあり、それを参考にしたとも推察できよう。

また、藤原顕季の歌（1061）は、前述のように『万葉集』（4178）の大伴家持の長歌に典拠を求め、「白塗」の白と「真白斑の鷹」の白を呼応し、「ゆらら」という擬声語に拠って表現している。

次に、狩の様子を詠じるにあたって、雉子を効果的に使っている歌として次の四首がある。

1067やかた尾の鷹手にすゑて朝たてばかたのの原にききすなくなり
1068とやかへるたなれの鷹を手にすゑて雉子鳴くなる片のべぞ行く
1071御狩人ちかく成行すずの音をかたのの原にきすいかがきくらん
1072はし鷹のしるしの鈴のちかづけばかくれかねてや雉子鳴くらん

このように「鷹狩」に「雉子」を詠み入れた歌例は、前述のように、初期百首である『源順百首』の冬の詠歌（516）に見出される。この詠歌は、既に金子英世氏がこの歌は「鷹狩」の中で「雉子」を詠んだ例としてかなり早いものとし、秋・冬の「鷹狩」に春の鳥という認識された「雉子」を詠み入れた点の新しさをご指摘している。[注7]

516きゝすなくのへになこひそ冬こもりかるへきものか人のこころ
　は

鷹狩に雉子を詠み込むという歌例はみられる。例えば、前掲の長暦二年権大納言師房歌合において詠まれ、定着の傾向が看取されるであろう。

『堀河百首』の「鷹狩」における雉子を詠じた四首はすべて「交野の雉子」が詠じられ、そのうちの三首（1067・1068・1072）は、「雉子鳴く」とし、鳴き声を主として聴覚的表現を効果的に使ったものと捉えられよう。その点から考えると、前述のように『源順百首』（516）鷹狩の歌に雉子が詠まれ、『曽根好忠集』（257）には「交野」と共に、「ききすなく」と詠じられていることから、これらの歌の影響を少なからず受けたものと考えられるであろう。その四首のうちの一首

（1071）は、聴覚的表現を中心にすえ、捕われる雉子に視点を置いた発想の詠歌と言える。

257ききすなくかたのの原をすきゆきては木の葉もことに色つきにけり

大きな鳴き声である雉子は『古事記』や『万葉集』に求婚の歌謡にみられ、それ以来雉子は妻を求めて高く鳴く鳥として数多く詠れている。

その雉子が『永久百首』において、春の歌題としてみえ、その七首はいずれも雉子の鳴く声を中心にし、聴覚的に詠じている。そのうち三首（107・110・112）は、狩の詠じた歌で、そのうち一首（112）は、鷹狩を詠んでおり、少なからず鷹狩が冬季の歌材として明確に定着されていないことが窺えるであろう。

112すずの音やちかくなるらんみかりのにかくろへかねてきぎす鳴くなり

このように、堀河百首題「鷹狩」で「交野」と「雉子」を詠じた歌は、少なくとも前掲の『順百首』の歌や好忠の詠歌の影響に拠ったものであろう。また、捕えられる雉子が鳴くという聴覚的表現に拠って拡がりをもたせた詠歌に仕上げられている。

以上のように、『堀河百首』における「鷹狩」の特徴として、いくつかの類形的発想に拠ったものに分類されることが挙げられる。まとめてみると、雪の白さと「白斑の鷹」の白を呼応させ、色彩を意識したり、鈴の音や雉子の鳴く声という聴覚的発想に拠って鷹狩の様子を詠じたりと様々な詠法の工夫が看取できる。また、「石瀬野」「うだ野」「比良」のように従来あまり詠まれていない歌枕、地名を『万葉集』や古歌に求め、しかも、『堀河百首』詠出歌人達の詠歌にそれらが散見できるという特徴がみられる。

そして、類形的な発想をしながらも「日影さす」や「友むれ鳥」のような新奇な歌語に拠った独自な詠法の工夫がみられることも「鷹狩」の特徴の一つとして挙げてよいだろう。

類形的な発想に拠る詠法は、「鷹狩」という比較的新しい歌題であるということもあるだろうが、既に、竹下豊氏がご指摘されているように、詠出歌人達が百首歌詠出に当って、歌人間の共通の話題・関心や詠出資料といったものや歌人達の交流がもたらしたものと考えることも可能であろう。[注(8)]

〈注〉

（1）橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河百首和歌とその研究　本文研究篇』（昭51　笠間書院）参照。

（2）三原まきは「歌題の確立と変遷」（「学習院大学国語国文学会誌」第38号、平7・3）参照。

（3）西山秀人「後撰集時代の屏風歌――貫之歌風の継承と新表現の開拓――」（『和歌文学論集5』、平7　風間書房）参照。

（4）前掲（3）に同じ。

（5）竹下豊「『堀河百首』の成立事情とその性格――堀河百首研究（一）――」（「女子大文学　国文篇」第36号、昭60・3）

（6）前掲（5）に同じ。

（7）金子英世「「源順百首」の特質と初期百首の展開」（「三田国文」第19号、平5・12）参照。

（8）竹下豊「『堀河百首』と出詠歌人の別詠――堀河百首研究（二）――」（「女子大文学　国文篇」第37号、昭61・3）

本文に引用した『万葉集』、『古今六帖和歌』、『堀河百首』、『永久百首』、勅撰集は、『新編国歌大観』（歌番号も同本に拠る。）に拠った。ただし、表記については改めたところがある。